

北條芳隆・溝口孝司・村上恭通著

『古墳時代像をみなおす』

——成立過程と社会変革——

河野 一 隆

一 古墳時代研究への問題提起

都出比呂志の提唱した「前方後円墳体制論」以後、古墳時代研究は、遺構・遺物の経験主義的な分析に基づく伝統的な文化史的考古学の研究動向と、社会構成体の解明を志向したプロセス的およびポストプロセス的な研究動向という2つの方向性に分離した。特に、後者では自省的な歴史認識の思潮を背景として、権力を生成する場の復元、表象・時間観念などの社会学的諸概念を外挿して、時代像を斬新な切り口で提示することが、新たな方向性を模索しようとする若い研究者を中心として、確かに息づいてきた。

「歴史の沈黙せる処は、墳墓之を語る。」これは、エトルスクの墳墓を研究したG・デンニスによる一節で、邦訳した浜田耕作の言葉である。①これが、考古学では自明のテーゼのように言われつつ、なぜ、墳墓資料が社会復元に有効なのかの論理が今まで提示されていなかった。上のような若い研究者による、新しい流れ

は、これに答えを与えようとしている。つまり、古墳に表象される觀念の実践の場として儀礼を考古学的に復元し、構造分析によって社会の實際表象であることの理由を示そうとしたものである。しかし、一方では本書でも指摘されているように、理論と実践の乖離の問題が顕在化してきたことも事実である。なぜ、その乖離が問題なのか。日本考古学の特質は、いわゆる文化財行政に携わる職員約七〇〇人によって恒常的に発生する膨大な考古資料の氾濫が、十分な保存・管理と普及啓発による社会的還元がなされないまま、日夜、蓄積されていることにある。この悪魔の囁き白のような現実こそが、発掘調査担当者の主体性の喪失と研究の停滞を招いていることは否定できない事実であろう。本書はこの乖離を埋めることを目的の一つとして執筆されたと言う。本書全体を貫いている刺激的で、ともすれば攻撃的な論調は、こうした現状認識を打開しようとする若い研究者達の苦闘の結果と言えるのかも知れない。

同時に、本書は考古学の社会的責務にも強い問題意識を払っている。本書の執筆時点では国家・権力・戦争をキーワードとして、紛争が絶えない現代世界の諸矛盾を解決するための手段の提示に、考古学も寄与せねばならないと主張されていた。不幸なことに、前期旧石器の捏造問題によって、考古学研究とその普及啓発に対する社会的な逆風には、本書の執筆時点よりも一層拍車が掛かってきたことは否めない。現在ほど、考古学の社会的寄与が求められている時代はあるまい。本書の主唱である体系的な人間の歴史認識の獲得のために、国民国家の枠組みを超えた、世界市民としての考古学の可能性を模索し続ける生産的な営為を、われわれは

見失つてはならないのである。

二 本書の構成と論点

本書の三名の執筆者は、いずれも三〇代後半―四〇代の気鋭の研究で、各々が自ら問題提起を行った第Ⅰ部とそれに対する回答論文である第Ⅱ部（コア論文）という独特の構成も刺激的である。これらの主張は、古墳時代研究におけるアブリオリのテーゼとも言ふべき、畿内の政治的勢力のイニシアティブを否定し、古墳時代を、食料生産経済としての水稻耕作社会に立脚した弥生時代以降の諸変革の到達点であると同時に、律令社会に向かって歩を進める国家形成の出発点と評価する点にある。

序

第Ⅰ部 理論的枠組の再検討

第一章 前方後円墳の論理（北條）

第二章 古墳時代開始期の理解をめぐる問題点——弥生墓制研究史の視点から——（溝口）

第三章 鉄と社会変革をめぐる諸問題——弥生時代から古墳時代への移行に関連して——（村上）

第Ⅱ部 古墳時代の開始と社会変革

第一章 前方後円墳と倭王権（北條）

第二章 鉄器生産・流通と社会変革——古墳時代の開始をめぐる諸前提——（村上）

第三章 墓地と埋葬行為の変遷——古墳時代の開始の社会的背景

景の理解のために——（溝口）

終章 提言（三者連名）

読み込んでいくと、執筆者によって用語の差異はむしろ、追求の対象とする問題点にも微妙なズレが認められる。行間を読むことで、そのズレを共有することも本書の楽しみを享受する一つの方法と言えなくもないと付言した上で、以下に個別論文の問題提起と回答について検討していこう。

（一）北條論文の問題提起と回答について

北條論文では、まず、研究史を瞥見して前方後円墳の基本認識を整理するが、その要点は以下の通りである。前方後円墳は王墓または首長墓であり、規模の大小が身分の上下関係の反映である。さらに最大規模の前方後円墳が奈良盆地や大阪平野に築かれていることにより、大和朝廷の前身である初期大和政権ないし倭王権は政権の中枢が畿内に存在し、前方後円墳の分布は支配者間の政治的統合の象徴に他ならず、分布域は大和政権の領域を示すと捉える。この基本認識を土台として作業仮説とされてきたのが、西嶋定生による、前方後円墳という定式的墳墓の造営行為の原理は擬制同祖同族関係が基盤であると捉えた見解である。前方後円墳に対するこの仮説は、大幅な修正を加えられつつも基本的な部分は温存され、再生産されてきた。このような現状の総括に立ち、筆者は前方後円墳を記紀に記載された天皇陵との連続性・継承性によって捉えること、さらには巨大墳墓を総体的奴隸制下におけるアジア的専制君主の実像表象とみることにについて、疑問を投げ

かける。つまり、墳墓の巨大性がいかなる政治的意図の元に必然化され、秩序や権力構造を維持する役割を担われたのか、明確な回答が準備されていないという。さらに、筆者は前方後円墳の畿内発生説と畿内からの一元的伝播といった理解にも問題があり、前方後円墳の分布がただちに政治領域を示すという見解にも警鐘を鳴らす。

筆者の問題提起は、つづめて言えば、記紀と濃厚に結びついて深化してきた古墳時代研究への問題提起である。春成秀爾が簡潔にまとめたように、喜田貞吉の古墳墓年代の比定や小林行雄の古墳時代研究をはじめ、大系的な古墳時代像を描こうとする時には、その基層には常に記紀に依拠または相克する中で、考古学的資料の位置付けが前提とされてきた。言うなれば、あらかじめ「定められた物語」の枠組みで古墳時代研究の諸成果が説明づけられてきたのである。この呪縛から脱却しようという主張は、評者にも理解されなくもない。しかし、冒頭で述べたように、現在の古墳時代研究の体系化が社会人類学の理論に偏重しており、経験主義的な研究成果との合一が要請されている現在ほど、記紀の影響を主体的・自省的に捉えるための研究史の総括が求められている時期はあるまいと私は考える。

これに対して、筆者は次のような回答を提示する。まず、大形前方後円墳が集中する大和が、その発生に当たって、政治的な主導性を発現した根拠とは必ずしもならないことを、研究史を批判的に検討する中で筆者は導き出している。つまり、古墳時代を通じて、畿内が前方後円墳という墳墓様式をリードしたことは事実だが、その発生時点においても大和や畿内が優位性を獲得したと

見ることは誤りだと言う。これを受けて、発生期の前方後円墳は多くの畿内以外の地域に系譜が求められる諸要素から構成された弥生墓制の集約的な実体であることを指摘する。特に、播磨・阿波・讃岐地域の発生期前方後円墳の地域的異質性（いわゆる讃岐型前方後円墳）を見出すと同時に、弥生墓からの連続性の顕著な第一群前方後円（方）墳（いわゆる纏向型前方後円墳・前方後円形周溝墓や前方後方形墳丘墓）と真正前方後円（方）墳ともいふべき第二群前方後円（方）墳とを弁別する。そして、第二群の成立によって第一群が淘汰されるのではなく、交替・融合する過程を基本原則と見る。これらを踏まえて、第一群の歴史的評価こそ弥生墳丘墓の不均等を整合的に理解する鍵であるとき、多面的な分業と広域流通網の担い手が、都出比呂志が注意を喚起した「中間階層」にほかならないと捉える。すなわち、畿内から畿外へではなく、第1群に評価に力点を置いた畿内からの、下位の階層からの社会的諸変革こそが公権力形成の契機とみ、前方後円墳の築造を公共事業複合体であると見なししているのである。

公共性を顕現させる権力主体、すなわち公権力は王権の前提であるが、特定の生産基盤を持たなくとも成立するのではなかろうか。少なくとも、集団重積構造を基軸とする社会構造において、公共性を特定個人の人格に委ねることは、儀礼という社会的な劇場効果が介在しない限り、不均等を闘争によつて是正するのではなく、首長制社会において権力主体が公共性を獲得するための説明が看過されてきたように私には思われる。社会の規範としての神聖性を評価して公権力の形成の基礎とした北條論文は、この問題

に回答を与えることを意図したものであり、首肯できる部分もな
くはない。しかし、畿内以外の地域や「中間階層」の墓制を評価
するあまり、その対立軸として位置づけた畿内の第二群（真正前
方後円墳）の被葬者に図式的なアジアの専制君主という共同幻想
をまとわせて、批判しているのではないかといった危惧を覚える。
地域の歴史生成を重視する視点のみならば、門脇禎二の地域国家
論においても提唱されていたのであって、体系的な歴史認識に進
むためには、教条的なアジアの共同体への批判をするだけでは生
産的とは言えないと私は考える。

（2）村上論文の問題提起と回答について

村上論文の問題提起は、生産力の発展と社会変革の担い手とし
て、必需物資である鉄および鉄器の生産と流通が果たした社会的
役割は大きいにも関わらず、考古資料からの実態の追求が不十分
なために、現状では硬直化した歴史的評価が与えられていると見
る点にある。つまり、水稲農耕を土台とする生産経済の不断の発
展が、前期前方後円墳に副葬された多量の鉄器から類推される弥
生時代社会の鉄器普及を過大に評価しているのと見るのである。こ
れを踏まえて、普及の実態把握、流通と社会変革の関係、地域間
の鉄器生産の技術的不均等と対外交渉としての鉄素材の移入の歴
史的評価、史的唯物論に依拠しない鉄および鉄器流通論について
研究の現段階が整理して、提示される。その総括として、他の学
問領域との接触やミドルレンジセオリーの追求と同時に、経験主
義的なローレベルの分析を根幹に据えることを重視せねばならな
いと筆者は主唱しているのである。

国家形成過程に鉄が果たした役割は、ここで改めて強調するま
でもない。前方後円墳の時代という政治的な成熟過程に内在する、
下部構造である経済的諸関係は、鉄器という考古資料から検証さ
れねばならぬという筆者の主張は正当であり、鉄器の遺存が希薄
であり、石器の消滅から「みえざる鉄器」を類推するという畿内
の弥生時代後期の社会の歴史的評価に対する批判も傾聴すべきで
あろう。そうであるならば、鉄器普及の意味する経済的諸関係の
変革をいかに説明するかが、当然、議論の焦点となる。回答論文
では、筆者は弥生時代の鉄器普及の地域性の顕現を、長期持続と
して捉える視点から、クリスチャンセンが提示するヨーロッパの
世界システムとして捉えた立場を意識した議論を展開している。

筆者は、生産経済の発展と社会的分業の深化を背景として、鉄
器普及の画期を弥生時代中期末―後期初頭と弥生時代後期中葉―
古墳時代初頭の二つと捉えている。第一の画期は、瀬戸内および
日本海沿岸の諸地域と北部九州との交易が、鉄器の受容や鍛冶技
術の獲得を促進したと評価するが、地理的環境に由来する農耕社
会の発展の相違や交渉の歴史性や契機の違いによって、差が生じ
ると筆者は見ている。瀬戸内地域においては、播磨―讃岐―阿波
ラインまでは生産・流通が維持されるものの、それより以東は拠
点集落間の交易によって間接的に鍛冶技術が伝播した結果と見な
す。一方、日本海沿岸では北部九州と山陰との間に鉄と玉といっ
た反対給付関係が形成されており、北部九州を介して朝鮮半島や
中国大陸の物流や情報を手しやすい交易関係が形成されていた
と見る。第二の画期においては、高度な生産技術に基づく潤沢な
鉄器が共同体内および地域間分業を促進させ、北部九州では鉄器

の生産と流通とが構造化した。しかし、北部九州は一種の経済的閉鎖を行つたために、瀬戸内地域では拠点間交易が製品と技術の弛緩を招いたのに対して、西部瀬戸内から山陰にかけては新たな鉄器普及・技術の窓口として位置づけられ、さらに以東の日本海岸諸地域への普及させるための鉄器生産体制が整備されていたと筆者は見なす。このような不均等をふまえ、古墳時代初期の鍛冶技術の革新も汎列島的に受容されたとは見なせないと述べる。すなわち、鉄器・鍛冶技術の跋行性は地域的な分業の進行の不均等を物語っており、それは漢民族による蕃夷意識の東遷という視点から捉えられるべきで、前方後円墳の発生におけるヤマトの求心力を評価すべきではないと筆者は主張する。

筆者の主張は、鉄および鉄器の生産・流通の実態の把握を中心に据え、山尾幸久や白石太一郎が主唱する倭国大乱→前方後円墳の発生期に、朝鮮半島南東部（弁辰）の鉄資源の流通ルートを保証するために、瀬戸内→畿内の首長層が政治的統一を形成したと見なす見解を痛烈に批判する点にある。なかでも、松本武彦による北部九州→瀬戸内→近畿という前方後円墳・祭祀ブロック、東海→北陸→関東の前方後方形墳・祭祀ブロック、山陰→北陸の四隅突出形墳墓・祭祀ブロックが、三世紀前半頃に対峙し、金属の広域流通支配をめぐる諸ブロックの抗争を経た統合という見解に対して、資料的な裏付けや実証性が希薄と論断し、かつ、抗争や戦争という人類の負の営みを持ち出すべきではないと批判する。確かに、北部九州・日本海岸諸地域と比較して、鉄資源への接近ルートが制限されている畿内地域の鉄器生産体制の構造化が、相対的に遅れているのはある意味で当然であるが、それなら

ば、なぜ発生期の古墳に鉄製品が集積しているのか。この疑問に対する説明が、漢人の蕃夷意識が播磨→阿波→讃岐ラインから東進したということだけでは、いかにも弱いように思われる。観念だけで国家はつくれないことは、下部構造を重視する筆者も当然気付いている。経済的諸関係と同様に、社会さらには政体の構造にもつこんだ議論を展開しないと、時代像を見直すということには到らないのではなからうか。

（3）溝口論文の問題提起と回答について

溝口論文の問題提起は、弥生墓制研究の視点から、古墳時代の開始を独特の葬送システム（葬送の道具と規範）が、分立する地域を越えて採用される広域現象とみ、それは「古墳時代を通じて進行する社会過程の『始発点』である」と捉えることである。これは、一見、目新しいようには見えないが、その眼目は決して皮相的なものではない。まず、高倉洋彰・春成秀爾の弥生時代墓制研究を祖上として、これらを伝統的に規定する家父長的な首長の初源を農耕社会の形成期にまで遡及させる論理構造を問題とする。この一方で、近藤義郎による前方後円墳発生の論理を整理して、人格的存在としての穀霊が祖霊と合一し、祖霊系譜として形成されてゆく過程から、首長間の擬制的同祖同族関係への転換には論理の飛躍があることも併せて指摘する。すなわち、発生期の前方後円墳の被葬者を、弥生時代を通じて進行する社会過程の終着点とみ、擬制的同祖同族関係を背景とした大和を中心とする成層化・構造化の帰結とする通説には、論理的な不整合が認められると筆者は指摘しているのである。以上の指摘は、英国で研鑽を積

んだ筆者らしく、日本人研究者ではつい看過しがちな過去から現在までの連続性に警鐘を鳴らしている点が特徴である。前方後円墳の被葬者は、多少の疑問があるにしても、記紀の何らかの反映であり、国民国家という共同幻想に拘束された現代のわれわれとの心的な一体性を無意識的な前提としてはいなかったのだろうか。

筆者の分析の強い論理志向と、やや晦渋な表現に読者は戸惑いがちであるが、物語の創造だけが歴史の研究ではないことを教えてくれる。しかし、多くのポストプロセス考古学がそうであるように、大系的な歴史認識の虚構を暴くだけでなく、論理的な分析によつてもたらされる新しい時代像の地平が提示されなければ、読者は決して納得しないであろう。そこで、筆者は回答論文で、財の生産・流通システムといった外部ファクターを参照し、モデル化を行っている。筆者の視座（新論理構造）の眼目は、前方後円（方）墳を「場」として捉え、そこで執行される葬送儀礼を権威の確認あるいは再生産のための「場面」と捉える点にある。特に、恒常的な贈与と負債の意識に基づく首長と一般成員の依存関係が直線的あるいは放射型の連鎖を構成し、依存関係のネットワークを拡張していくことを指摘する。かくして形成される「樹状図」型依存関係ネットワークは、必然的に畏敬の意識を生み出すための、参集のための移動距離を増大させる。同時に、その中においては、量的性質よりも質的・意味的性質に依存する財の交易が重視されるようになる。このプロセスこそが、広域現象としての葬送システムである前方後円墳の発生と筆者は見なしているのである。この理論的な総括を裏付けるために、弥生時代中期―後期にかけての北部九州の弥生墓の分析を行い、北條・村上両論文との

折り合いを付けている。

筆者の図式については、評者も弥生時代中期末から天武朝までの長期持続的過程を倭王権と位置付け、その前半にあたる初期王権（弥生時代）と盛期王権（古墳時代前期―中期末（雄略朝））とを威信財経済と考えるものであり、共感できないこともない。特に、財の物神性に着目して、交易（依存関係ネットワーク）が畏敬の念という首長の権威の再生産に大きく関与したという指摘は聞くべきであろう。しかし、財の量的性質や質的・意味的性質を規定するための考古学的な方法論を確立するためには、C・レンフリー^⑧や日本では宇野隆夫や野島永^⑨が提示したように、具体的な考古資料の分布を押さえたモデル化も併せて示されなければ、「威信財」がそうであるように意味の過剰を招きやすいと考える。また、かかるモデル化になぜ墓制研究が有効なのかの説明も、なされていないように感じる。さらに、経験主義的な時代像との理論的な整合のためか、問題提起における非常にポストプロセス考古学的な論理展開と回答論文でのプロセス考古学的な帰結に違和感を感じるの筆者だけであろうか。

本書の最後には、三者連名で古墳時代研究に対する共通認識が6つの提言として示される。すなわち、首長制の成立と公権力生成プロセスの分析、生産財と威信財の交換行為に着目した権力生成論の再構築、アジア考古学の成果を踏まえた方法論の国際化、資料とモデルの相互批判の必要性が、今後の古墳時代研究の課題として深められねばならないという。この提言は、首長墓系譜の動向が単なる政治的諸関係の反映ではなく、首長制の成長と公権

力の形成との断絶性を強調することで、王や首長の埋葬儀礼が公共性を獲得する論理にこそ古墳築造の社会的意味が見いだせることを指摘したものである。はからずもそれは、古墳時代像が、かつて『王陵の比較研究』^⑧が意図していた比較考古学の検討対象として、見なおされねばならないことを謳ったものと位置づけることができる。

二 古墳時代の論理の構築にむけて

本書は、現状の古墳時代像に痛烈な批判の書であり、ともすれば、問題意識を見失いがちな埋蔵文化財行政に身を置くわれわれにとって、モチベーションの高揚となることは疑いない。しかし、折に触れたように現状を批判することが必ずしも正しいとは限らない。以下、やや批評気味の読後感を三点に纏めて述べてみたい。

まず、畿内の主導性を低く見積もる主張であるが、畿内の主導性が顕現する考古資料を検討の対象からはずしているのではなからうかという疑問が第一点。例えば、画文帯神獸鏡の畿内集中、突線鈕式銅鐸の規格性、庄内河内型甕・0式布留甕・嚢向型前方後円墳の畿内以外への拡散現象についてはさほど言及されず、さらには畿内以東の前方後円墳世界の動向にもほとんど触れられていない点も気になる。西日本の前方後円墳の発生のみを論じるならばともかく、古墳時代像を見直すというタイトルを謳うならば、調査成果のめざましい東海・東国の古墳時代史の論理を取り入れた説明をしなければ、西日本と東国の接触が描き出すダイナミックな古墳時代史への接近は生まれないと私は考える。

第二点として、第一と同様の意味において、古墳時代中期以降

の社会構成体の構造変化についても触れられていない点も気になる。本書のように、古墳時代を律令国家への出発点と見なす視点にも立ち、なおかつ前方後円墳発生期の畿内のイニシアチブを低く見積もるならば、それでは、なぜ、さらには、いかにして畿内の政治的求心力が発揮されたのかの説明が必要だ。とくに、文献史学では画期としての雄略朝が重視されているから、この説明なくしては国史学が築き上げてきた諸概念との乖離は埋まらないであろう。さらに、これと関連して、溝口孝司と山尾幸久との論争で顕現した天皇制と考古学的成果との擦り合わせの問題が残っている。権力・権威の再生産機構としての天皇制は、公権力の日本的な表徴であるから、古墳時代像の再構成と歴史的評価は天皇制の形成プロセスと不可分の問題であるはずだ。競争的な首長制社会が古代国家へ転化する鍵が古墳時代研究には潜んでおり、そこには、石母田正が指摘した国際的契機への視点が不可欠であるにも関わらず、東アジア史における中国帝國的秩序との関係が本書の記述からでは見えてこないのではなからうか。

第三の問題として、従来の史的唯物論、とりわけアジア的生産様式論との折り合いが問題にされねばならないだろう。本書では、従来、暗黙の内に畿内の首長と同一視してきたアジア的共同体を統括する専制君主という共同幻想を否定することが読みとれるが、その反動でアジア的生産様式を余りに教条的に捉えすぎてはいないだろうか。本書の批判の対象であるアジア的共同体、アジアの専制君主とは、戦後のアジア的生産様式論争によって形成された共同幻想としての専制君主像であるように、評者には感じられる。しかも、古墳時代研究者は往々にして看過しがちであるが、足立

啓二が正しく指摘したように、専制君主とは共同体重積構造の頂点に君臨するのではなく、質的にも隔絶した実体なのである。そうでなければ、競争的な首長制社会から公権力が生成されるプロセスは見出せないし、逆に、特定の人格が支配の正当性という権威、すなわち一種の公共性を獲得するための仕掛けである儀礼のもつ社会的機能^④が正当に評価されないであろう。本書の執筆者は古墳時代を国家段階と考えているのだろうか。あるいは別の歴史認識のための枠組みを準備しているのだろうか。

冒頭に紹介したG・デンニスの言葉が端的に示すように、現在の古墳時代研究に求められているのは、社会と墳墓資料とを結び付けるための論理であると私は考える。規模の大小や副葬品の多寡、墳形の差別化が社会構成体内部の差異をどれだけ反映しているかの評価には、研究者ごとに差異があるに違いない。かつて擬制的同祖同族関係という歴史概念を外挿させることで、考古資料の分析結果との折り合いが付けられ、初期国家概念の導入によって、このキーワードも目にするのが少なくなった。近年では、国民国家の概念の克服によって、人間集団のまとまりとそれによって規定される観念にも、多義的な変化が生じてきている。古墳時代研究は、これからどこへ向かおうとしているのか。目新しい概念の採用や現状の批判だけが歴史を進める原動力なのではない。概念を創造し、再生するサイクルを恒常的に維持していくこそが、停滞を招きがちな研究を不断に前進させるに他ならないことを私は信じてやまない。

註

- ① G. Dennis, *The Cities and Cemeteries of Etruria*, 1883, pp. 68-70. 浜田耕作「日本の古墳に就いて」『東亜考古学研究』一九四三、四八一頁
- ② 佐藤啓介「『表象』の基礎構造について」『表象としての鉄器副葬』（第七回鉄器文化研究集会資料）、鉄器文化研究会、二〇〇〇
- ③ 例えば、畿内あるいは大和の権力主体について、北条論文では「大和勢力」、村上論文では「ヤマト政権」、溝口論文では「大和」地方を中心とする地域間関係（「系列化」）と呼び分けられており、古墳時代の権力構造に対する洞察の差異を示唆している。また、同一論文でも、「倭国王」と「倭王」、「成立期古墳葬送システム」と「開始期古墳葬送システム」などの類義語も看取される。
- ④ 春成秀爾「考古学と記紀の相克」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七〇集、一九九七
- ⑤ 評者は、前方後円墳という墳墓様式における、畿内のイニシアチブが顕現する時期を、福永伸哉の新式神獸鏡の評価ならびに副葬品組成の変質の指摘を重視して、古墳時代前期中葉とみ、その背景には西晋の滅亡・八王の乱といった国際的諸契機を重視すべきと考えている。福永伸哉「古墳時代前期における神獸鏡製作の管理」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室一〇周年記念論集—』、一九九一
- ⑥ 例えば、山尾幸久は、天皇制の特質に特定の生産基盤を持たないことを指摘する（山尾幸久「継体朝の終末と磐井の乱」『継体大王とその時代』、二〇〇〇、二八一頁）。北条芳隆の「公権力の中樞は社会的諸前提を具備しない」（本書二七七頁）との指摘も、天皇制か否かは別として、これとはほぼ類義と理解されよう。
- ⑦ 河野一隆「森の王」『京都府埋蔵文化財論集』第三集、一九九六

⑧ C. Renfrew, *Approach to Social Archaeology*, 1984

⑨ 宇野隆夫「西洋流通史の考古学的研究——イギリス考古学の研究動向から——」『古代文化』四八一〇、一九九六

⑩ 野島 永「鉄器から見た諸変革」『国家形成過程の諸変革』、考古学研究会、二〇〇〇

⑪ 小野山節編『王陵の比較研究』、一九八一

⑫ 溝口孝司「考古学研究の基本構造に関する一試論——欧米考古学を主要な素材としての分析と提言——」『考古学研究』四四一一、一九

九七

山尾幸久「歴史学・考古学・人類学——溝口論文に触れての偶感——」『考古学研究』四四一四、一九九八

溝口孝司「メタセオリー、一般理論と考古学の場所」(同右)
都出比呂志「国家形成の比較考古学の提案」(同右)

⑬ 足立啓一「専制国家史論——中国史から世界史へ——」、一九九八

⑭ 青木 保『儀礼の象徴性』、一九九八、一八三—一九九頁

(A5版 二九九頁 二〇〇〇年八月 青木書店 三八〇〇円＋税)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員